

戦略的にその名前を共有する川に沿った場所にあり、中津城は日本でたった 3 つしかない水城の一つである。それに隣接する城下町も攻撃する敵の接近を妨げるよう設計されていた。黒田孝高(1546-1604)は武将豊臣秀吉(1537-1598)によってその地域の大名に指名された後、1588年から中津城の築城を開始した。黒田が1600年、徳川家によって福岡に移されたとき、細川忠興(1563-1646)が彼に取って代わり、その城を占拠するために息子を送った。後になって、その領土は小笠原家(1632～)と奥平家(1717～)によって支配されることになる。

城を囲む近隣は数々の寺や神社の本拠地となっている。そしてその多くは江戸時代(1603-1867)に大名によって建立された。これらのうち最も有名なものは合元寺である。それは今異様なまでの赤い壁で知られている。その色は宇都宮鎮房とその仲間の殺戮を象徴するものである。鎮房は1588年に陰謀を企んだ権力強奪者だった黒田孝高を殺そうと企てた。彼の家来達はここ合元寺で殺されそうである。そして建物の内外にある切込みは殺戮中に残されたものだと信じられているということだ。その地域での他の注目すべき寺には圓龍寺、自性寺、円能寺がある。